

平成26年度 宇都宮大学 全学FDの日

1. 日 時 平成26年9月29日（月）13時から
2. 場 所 大学会館2階 多目的ホール
（工学部アカデミアホールに映像・音声配信）
3. 日 程
【表彰】
13:00 ベストレクチャー賞表彰及び受賞者による授業実践の紹介

【全学FDシンポジウム】
14:40 挨拶（学長 進村武男）
14:45 講演「大学におけるIRの実際と役割」
（同志社大学社会学部教授 教育支援機構 副機構長
学習支援・教育開発センター所長 山田 礼子 氏）
15:45 質疑応答
16:30 終了（予定）

（参考：学部等の取組）

10:00～11:30 個別FD活動

国際学部：峰町5号館A棟4階 大会議室

教育学部：峰町8号館C棟2階 大会議室

工学部：機械系 7号館4階 機械システム工学科会議室

電気系 4号館2階 電気電子工学科会議室

化学系 2号館2階 223番教室

建設系 8号館4階 建設工学会議室

情報系 9号館1階 情報工学科会議室

農学部：峰ヶ丘講堂

基盤教育：峰町5号館B棟1階 ラーニング・コモンズ1

目 次

第 11 回「宇都宮大学ベストレクチャー賞」受賞者名簿・・・・・・・・・・	1
第 11 回「宇都宮大学ベストレクチャー賞」選考要項・・・・・・・・・・	2
講演「大学における IR の実際と役割」 （同志社大学社会学部教授 教育支援機構 副機構長 学習支援・教育開発センター所長 山田 礼子 氏）・・・・・・・・	3

※第 11 回「宇都宮大学ベストレクチャー賞」受賞者による授業実践の紹介
資料は別添にてご用意しております。

第11回「宇都宮大学ベストレクチャー賞」受賞者名簿

学部等名	授業科目名	担当教員名	備 考
国際学部	比較文化論演習	ライマン アンドリュウ ニール	表彰式(全学FDの日)における発表者
教育学部	初等理科教育法	人見 久城	
	書写	中島 望	表彰式(全学FDの日)における発表者
	初等国語科教育法	森田 香緒里	
工学部	設備工学Ⅲ 設備工学Ⅱ	郡 公子	表彰式(全学FDの日)における発表者
	建築材料Ⅱ	杉山 央	
	制御工学	平田 光男	
農学部	基礎無機化学 食品加工論	橋本 啓	表彰式(全学FDの日)における発表者
	生物化学Ⅰ 生物化学Ⅱ	蕪山 由己人	
基盤教育	Honors English H	ベナー バイロン グラント	
	新入生セミナー	山口 喜雄	
	ビジネス日本語	梅木 由美子	
	フィールド生物学	高橋 滋	表彰式(全学FDの日)における発表者

第11回「宇都宮大学ベストレクチャー賞」選考要項

平成26年5月28日 教育企画会議

本学では、基本的な教育目標として「広く社会に開かれた大学として、質の高い特色ある教育と研究を実践し、人類の福祉の向上と世界の平和に貢献する。」を掲げている。

この教育目標を達成するための一環として、優れた講義を行っている教員にベストレクチャー賞を授与し、併せて、教員相互の授業改善の意識向上に役立てることを意図している。

なお、ベストレクチャー賞は、優れた授業への取組みであることに鑑み、本学における志願者確保等の観点から、その取組内容を広報活動においても活用することとする。

以下に「第11回宇都宮大学ベストレクチャー賞」の選考について必要事項を定める。

1. 対象は、専任教員が担当する学士課程のすべての授業科目（以下「科目」という。）とし、当該科目を複数で担当している場合は、その代表者とする。
2. ベストレクチャー賞の選考は、平成25年度前期及び後期の「授業評価アンケート」を参考に、教育企画会議において決定する。
 - ①国際学部、教育学部、工学部、農学部の専門教育科目担当者及び基盤教育科目担当者から選出する。候補者数は開講科目数を勘案し、基盤教育4名、国際学部1名、教育学部3名、工学部3名、農学部2名とする。
 - ②「授業評価アンケート」の回答者数が10名以上の科目を対象とする。
 - ③授業評価項目4から9の平均点は、概ね4.0以上とする。
 - ④その他、選考内容・方法は教育企画会議が定める。
3. ベストレクチャー賞受賞者には、「全学FDの日」において学長から表彰状、副賞及び教員研究費10万円を授与する。
4. ベストレクチャー賞受賞者の取組内容については、他の教員の授業改善の意識向上に役立てること、さらには広報活動に活用するため、以下の事項について考慮する。
 - (1) 受賞者は授業に対する心構えや取り組み方などをまとめた資料「授業概要」を作成し、「全学FDの日」において15分程度の発表を行う。
 - (2) 「授業概要」を学内向けHPに公開するとともに、オープンキャンパスの日などに模擬講義を実施する。
 - (3) 受賞者の模擬講義（10分～15分程度）をビデオ収録し、これを蓄積したものを本学HP等に公開する。

大学におけるIRの実際と役割：
教育の質保証にむけて

2014年9月29日

宇都宮大学

山田礼子 同志社大学

日本の高等教育政策の動向と
認証評価

高等教育政策の動向と新たな方向性

- 2012年中教審答申より→高等教育が質的転換が求められる
- 2013年 中教審の議論
 - 認証評価の大きな転換
 - 第2サイクルの認証評価における書く評価機関の取り組み
- 自己点検・評価を通じて、人材養成目的や知識・技能体系等を明確にして、それが機能していることを確認すること
- 第2サイクルの認証評価では、各認証評価機関は、学修の成果や大学の自主的・自立的な質保証を重視した評価に発展させている。

重要な転換点

学習成果の評価の重視 内部質保証システムの評価

求められる内部質保証とIR

- 第二サイクルに入った認証評価においては、「内部質保証」が重要な課題
- 内部質保証とIRは切り離せない関係



IR機能の充実が内部質保証の充実に

新しい高等教育のマネジメント:IR誕生の背景

- 日本の高等教育をめぐる状況の変化
競争的環境の創出、教育成果の提示、研究の高度化、
管理運営の組織化等
- 国立大学の法人化: 中期目標・中期計画の策定と実行が不可欠に
- 課題 データの一元化と管理 財務、教学、学生

- ・法人化以降 国立大学にとってデータの一元化は中期目標を立てるうえでの重要な戦略
- ・経営面 安定した学生の確保と質の維持
- ・教育面 個々の大学における教育成果の提示をどうするかが重要な論点

情報公表の重要性と認証評価

- 認証評価に際して、大学ポートレート(仮称)の活用の可能性の高まり
- 学習成果を重視した評価
インプット中心から、プロセス・アウトカムを重視した評価
その際に、大学ポートレートを活用
「大学ポートレート」等を用いて、積極的に情報公表に取り組む大学の評価を簡素化
- 私立大学においては、私立学校振興・共済事業団で構築するデータベースを活用するという計画

前中教審での重要課題としての情報公表

- 現中教審での重要課題のひとつ—情報公表をどうするか
- IRと情報公表は深い関連性
 - IRの進捗によって標準データベースにもなる可能性
- 社会によくわかる情報を提供という声の高まり
 - ・入試状況、財務状況、学生の学習成果
(できれば同様の指標で)
- 2006年のアメリカ・スプリングス委員会報告により一気に
共通データベースが進捗
 - ランドグラント大学で開発されたデータベースの存在
何がわかるか＝志願者数、入試競争倍率、SATおよび
ACTの平均点、CLAの1・4年次点数、CIRPやNSSEの学生
満足度等大学間比較になるデータが公開
- 2011年より大学ポートレートの構築と情報公表が進展
どのような項目を公表していくか

大学ポートレートに向けて

- 現在、大学ポートレート構築が進捗 2014年10月より
- 私立大学は私学振興事業団のデータベースによって参加
- 国公立大学は、大学ポートレートに統一したフォーマット
で大学情報(教育情報、入試情報等)を提供
- その運用と活用においてはIRとも深く関連
- IRの活用および運用、データベースについては
日本の多くの大学で運用できる人材が不足

答申での「教育の質転換」メッセージ

2012年中教審答申における確認： 学士課程教育の改革サイクル

- ▶ 学生の学修成果の把握については、アセスメントテスト（学修成果の測定・把握のための調査）、学修行動調査、ルーブリック（学修評価の基準）の活用関係機関が、諸外国の例も参考にしつつ、学生の学修到達度を測る方法や学生の学修行動の調査方法等、我が国に適した評価手法について、大学支援法人、大学間の連携、学協会を含む大学団体等による速やかな研究・開発を推進する必要性



教学マネジメントを支援するツールとしての教学IRの機能

質を伴った学修時間の実質的な 増加・確保を始点とした好循環

- 学修時間の増加は準備と深い学びとの深い関係
- 全学的な教育マネジメントの改善
- 教育課程の体系化
- 組織的な教育の実施
- シラバスの充実



教育マネジメントをいかに機能させ、教育の質保証
あるいは教学ガバナンスの強化を実現するか

教育の質保証のために何をすべきか： 教学IRの進展

大学IR (Institutional Research)とは、大学運営や
教育改革の効果を検証するために大学内のさまざ
まな情報を収集して数値化・可視化し、評価指標
として管理し、その分析結果を教育・研究、学生支
援、大学経営等に活用する活動

教学IRとは、そうしたIR活動を教育面に焦点化し、
教育の質保証をしていくための支援ツール

IRの原理とは

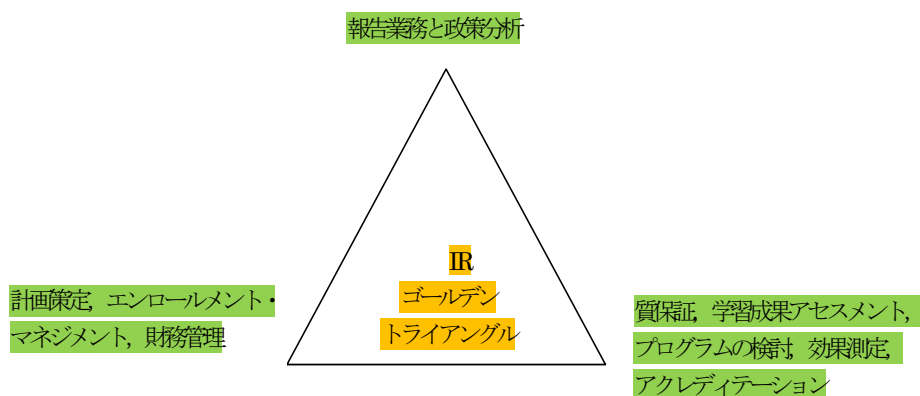
IRの定義

- ▶ サウプの定義＝組織の企画、政策策定、意思決定を支援する情報の提供
- ▶ ピータソンとコラソンの定義＝サウプの定義＋
全分野における資源配分、管理、評価
- ▶ マッセンの定義＝
 - (1)機関の業績(成果)についてのデータ収集
 - (2)機関の環境についてのデータ収集
 - (3)収集したデータの分析と解釈
 - (4)データ(資料)分析と解釈、機関計画策定そして
政策策定と意思決定支援情報への変換

アメリカにおけるIRの具体的な活動

- アク্রেディテーション関連業務とプログラムの検討
- 運営管理上の情報の提供と計画、学内政策策定とプログラム評価のための分析
- 学生、大学教員、職員のデータ収集と分析
- 予算および財政計画策定
- 学生の学習成果の評価のためのデータ収集および評価（アセスメント）実施と分析
- 学生による授業評価事業の実施
- 学生の履修登録管理と募集管理
- 年次報告書の作成
- 州の財政補助金獲得のために必要とされる書類の作成などの州高等教育部局との連絡調整
- 米国教育省の調査事業に提出するデータの作成
- 大学関係出版物への情報提供
- 戦略計画策定

ボルクワインによるIRのゴールデン・トライアングル・モデル



出典:ボルクワイン, F. (2011). *Navigating the Winds of Change: Coping with the Challenges of Institutional Research IR* 18枚目資料の翻訳
『IRシンポジウム報告書, 平成21年度採択文部科学省, 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公立4大学IRネットワーク』31-44頁

トライアングル・モデルからの示唆

- IR中心業務＝報告、政策分析、計画策定、エンrollment・マネジメント、財務管理、質保証、学習成果のアセスメント、プログラムの検討、効果測定、アクレディテーション対応



- 集権化あるいは分散化の度合いによる差異が存在

日本におけるIR

日本におけるIR普及と進展に向けての課題

- ▶ アメリカに比べて急速な環境変化という前提で対応できるような組織となっているのか？
分析の視点：既存の大学教育研究センターはIR部門として機能すべきか、すべきでないのか
- ▶ IR部門が存在しているのか？
- ▶ 専門職の存在と育成は？
- ▶ 教学IRに特化したケースはどのような場合か？

日本におけるIR部門の現状

- 2010年江原氏による調査結果の紹介
- 22年度版全国大学一覧に記載された国公立大学753校を対象 回答校136大学
- IR部門の設置 21%
- IR部門の名称 IR=10校 企画=48校 評価=13校 混合名称=6校 その他=23校



IRという用語も本来の意味も浸透していない日本

2013年度文科省による東京大学委託調査でもIRを設置している大学は約25% ただし、予定を含めると30%をこえる。

教育の質保証と教学IR

教育の質保証： 第一ステージから第二・第三ステージへ

- ▶ 第一ステージ: シラバス、GPA制度、CAP制、学生調査等を導入してきた今までの各大学の取組
- ▶ 第二ステージ: IR機能の充実、IRを活用した評価、その評価結果を単位の実質化、学生の学習時間の確保に結びつける教育環境の整備の段階



- ▶ 第三ステージ: データの結果と評価を学生教育への還元

質保証の一環としてのデータの活用

- 何を教えるかから何ができるかに発想を転換
- 学生の現状を客観的データから把握
- 学生の高校時代の情報と現状とを関連づけて分析
- アウトカムとカリキュラム、あるいは授業とを関連づけて分析
- 授業評価と学生データとを関連づけて分析
- 教員のFDに学生データを活用

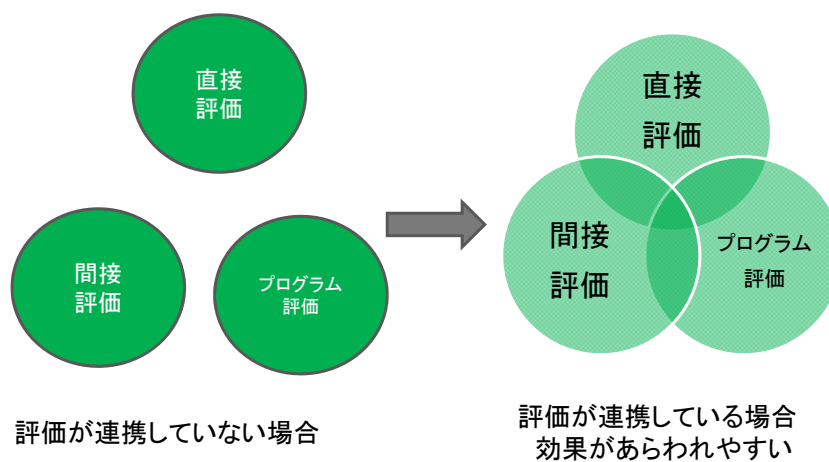


カリキュラムの見直し、教授法の見直し

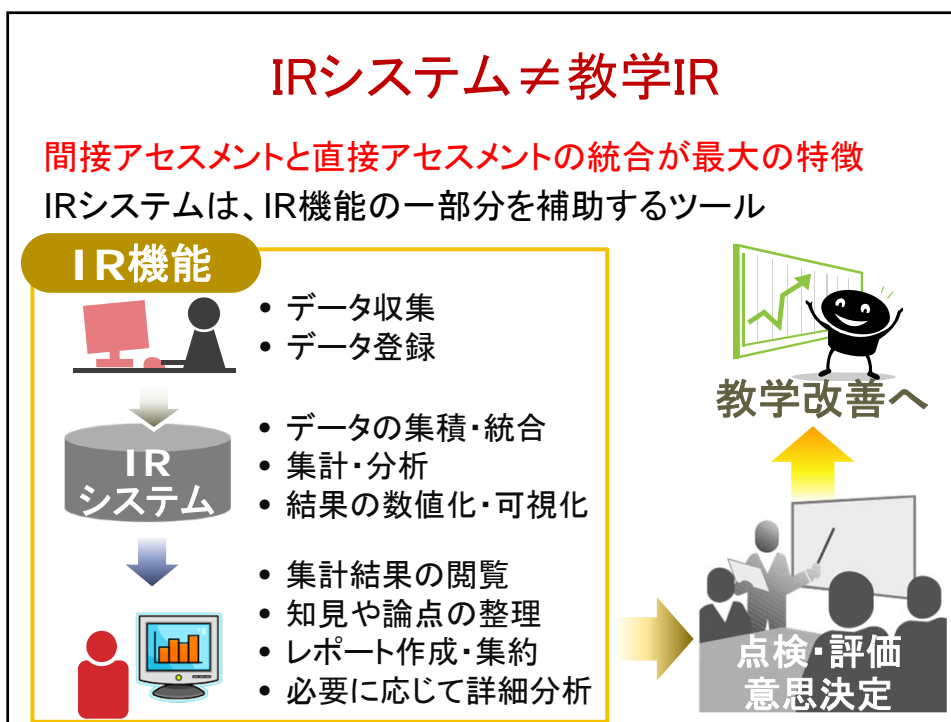
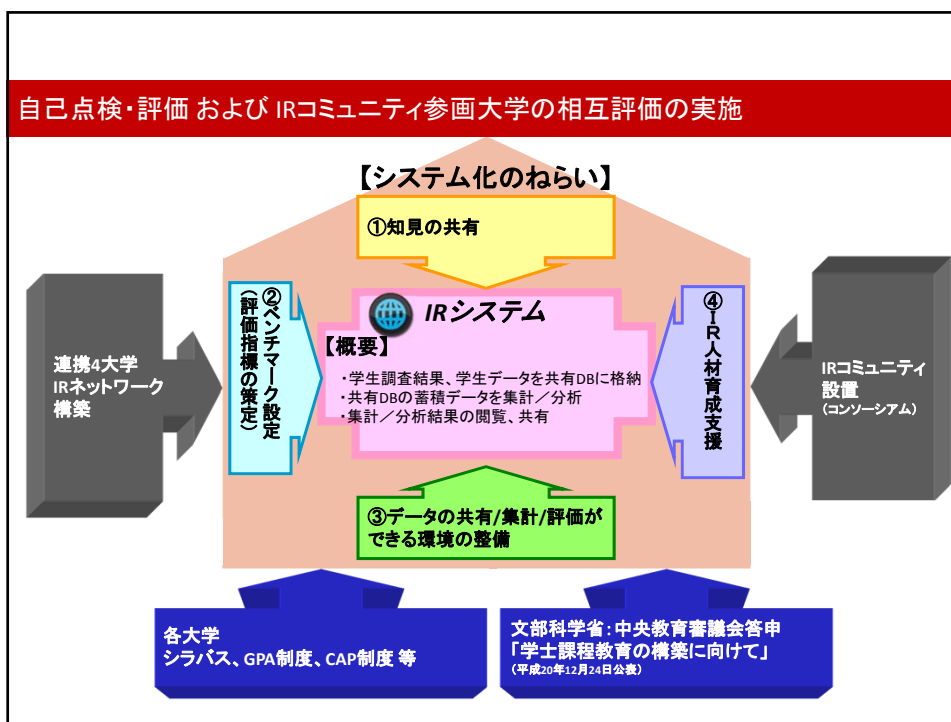
アウトカム・アセスメントに関する 直接評価と間接評価の使用モデル



アウトカム・アセスメントの効果



IRコンソーシアム設置：大学間連携による
教学IRの活用へ



IRシステムの機能と利用権限

機能		会員校ユーザの利用	一般ユーザの利用
集計結果表示機能	単純集計	●	●
	クロス集計(相関係数)	●	●
	グループ別平均値	●	●
	設問同士の比較	●	●
	同一個人の変化	●	●
分析機能	集計結果表示対象の選択	●	×
	相互比較	●	×
	分析軸の追加(クロス集計作成)	●	×
データベース機能	ファイルアップロード	●	×
	ファイルダウンロード	●	×
	集計表のダウンロード	●	×
ログイン機能	ログイン認証	●	×
	ユーザ登録情報の編集	●	×

集計結果の表示

集計表とグラフによる、シンプルな結果表示



- ・インターネット経由で閲覧
- ・専用ソフトの導入は不要
- ・複雑な分析操作も不要



大学IRコンソーシアムの活動

連携大学間における IRネットワークシステムの構築

- ▶ 学生調査結果を自動化する分析システムを開発
- ▶ 連携4大学では異なる業務データや教務データを保持しているが、そのデータを使いIRシステムの分析などを行うことで、相互評価を行えるようなシステムを開発

直接評価と間接評価の連結による評価



参加大学の分析負担を軽減
自大学のデータとも連結可能
情報セキュリティの確保 匿名化ツールの開発

教学IRの基本となる学生調査の特徴

- ▶ 学生の学習行動、学習時間、能力に関する自己評価、満足度を中心とした調査項目
 - ▶ 学習プロセスの測定
 - ▶ 継続することで、学生の経年変化、成長を把握
 - ▶ 他の学内データ(成績など)とリンクさせた分析も可能
- ▶ 会員校の間で共通の調査項目
 - ▶ 相互比較が可能
 - ▶ ベンチマークとして利用できる標準調査として位置づけられる(モデルは、米国のNSSE/CIRP)

IRネットワークを活用した相互評価とベンチマーキング

- ▶ 学生調査結果分析を4大学間で比較検討、傾向や対策を相互評価→教育の質保証の向上と指標の設定
- ▶ 北海道大学 単位の実質化や学習時間確保の実績
- ▶ 大阪府立大学 策定中のラーニング・アウトカム
を参照しながら



ベンチマークから相互評価方法の模索と確立

国公立4大学IRネットワークの活動と特徴

- 設立主体も立地も規模等も異なる大学間の垣根を越えて共通の学生調査を実施
- 学生の学習行動、学習成果、教育の効果等に関する基礎データを蓄積し、分析
- 各大学内に散在している学生の教務データや入学関連データ、各大学の基本情報を収集・管理し情報を一元化するシステムの開発
- 個別の大学での教育効果の測定および連携大学間での「相互評価」を可能

自律的・自立性にもとづく質保証・教学ガバナンスシステムの構築

大学IRコンソーシアムの発足の過程

- 「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出
— 国公立4大学IRネットワーク」による4大学連携
- ↓
- 国公立8大学IRネットワーク:「教学評価体制(IRネットワーク)による学士課程教育の質保証」
(平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業)
へ発展
- ↓

2012年9月からIRコンソーシアムが発足

IRコンソーシアムの発足

4大学連携(同志社大学(事務局)、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学)から拡大→18校が加盟

3年以内に30校を目指す

会費制 年間30万+学生調査実費

コンセプト:学生調査と相互評価をベースにしたベンチマーキング
そして教育改善へ



大学間連携による教育改善の仕組みの構築と
コラボレーションの発展への可能性

連携関係

8大学IR ネットワーク

- ・ 教学評価体制の充実
- ・ アウトカム評価の確立
- ・ 英語力の評価体制
- ・ 大学教育の職業的レリバ
ンスの検証



大学IRコンソーシアム

- ・ 教学評価体制の基幹をな
すIRネットワークシステム
の運営
- ・ 情報の一元管理、個別の
大学での教育効果の測定
- ・ 学生調査による連携大学
間での「相互評価」の機能
や機会の提供

大学間連携による教学IRの意味は？

- * 日本の大学の教学マネジメント・ガバナンスの問題は？
- * 教育のガバナンスの不在
- * 大学を動かすための外部からの仕掛け(支援や評価)の構築
- * 大学によるガバナンスの多様性



大学の個別性を考慮しつつ標準性を活用
することで大学間連携教学IRの仕組みの構築

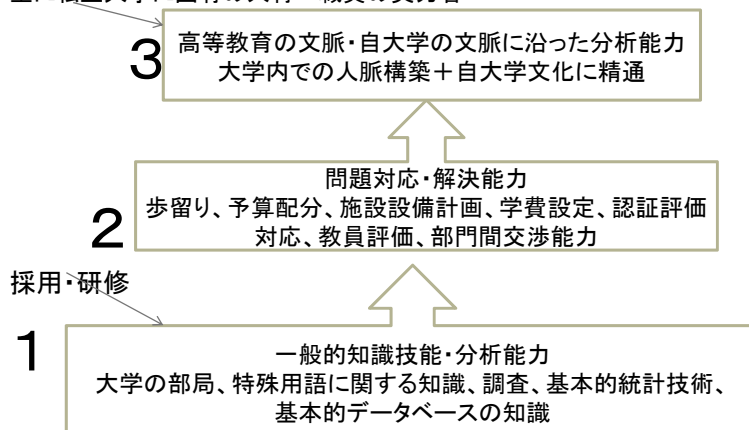
キーワードは

大学による自律的、自律性の高い取り組みと連携体制

IR専門職に求められる資質とは？

• (Terenziniの三層＋私見)

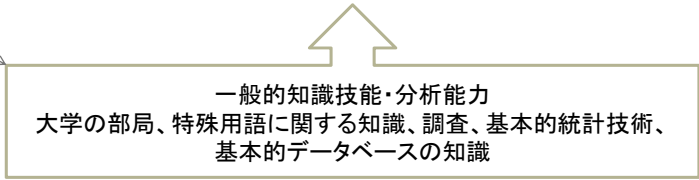
主に私立大学に固有の人材＝職員の実力者



IR人材育成ワークショップの提供

- ・三層構造の1段階の人材のための養成ワークショップ
- ・大学固有の実力者は養成できない
自大学での育成を期待しかし、基本は大学間連携で可能
- ・研究志向ではなく、機関のためのアイアラーになることを理解した人材を養成していかねばIRは広がらない

採用・研修



一般的知識技能・分析能力
大学の部局、特殊用語に関する知識、調査、基本的統計技術、
基本的データベースの知識

大学間連携による大学IR
コンソーシアムの可能性と課題

大学による自律的、自立性の 高い取り組みと連携体制の意義は？

- エビデンスベースに基づく現状評価文化の浸透が不可欠
—大学では難しい障壁を大学間で可視化された情報を共有し相互評価をすることで問題を認識、協力しながら、教育の改善へと結びつける
- 特徴： 相互性、自律性、自立性、大学間の信頼関係
- 中間支援組織としての機能及び役割
設置形態を越えての協働体制→世界で初めての活動
2014年9月現在で38校が加盟 13校⇒38校

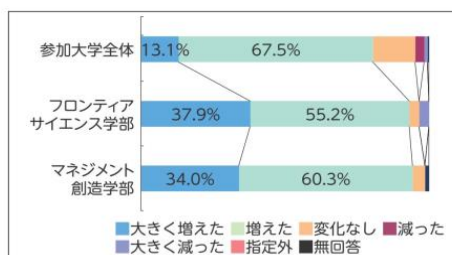
教学IRの活用可能性

- ▶ 教学マネジメントの支援のしくみ
- ▶ 相互比較による教育の内部質保証のしくみ
 - ▶ 教育アセスメント: 自学の学生の学びの実態把握
 - ▶ 標準性の検証: ベンチマーク指標として活用
 - ▶ 個別性の充実: 自学の教育成果の確認
- ▶ 機関評価、認証評価(第2サイクル)への活用
 - ▶ 「各大学の特徴がより明確に把握できる客観的な指標の開発、大学がその機能を踏まえて重点を置いている教育活動や研究活動に着目した評価」
(中教審大学教育部会「審議のまとめ」2012年3月24日)

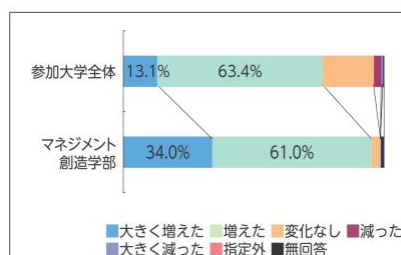
連携取組の新たな展開

- データが集積、それらをもとに議論ができる題材がそろそろ
学生調査部会 → 課題の抽出 大学固有の問題 共通性
- 8大学プロジェクトとの連携
英語教育部会
学生調査結果の集積と分析から得られる知見を
大学教育への還元へとつなげるステップ
- 大学が増加することで、教育改善事例の把握と蓄積
それらを集めてGPの事例集積→ゆるやかな教学改善
コミュニティの形成

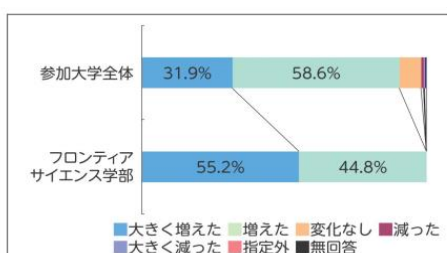
甲南大学の認証評価での利用



入学後の能力変化：一般的な教養



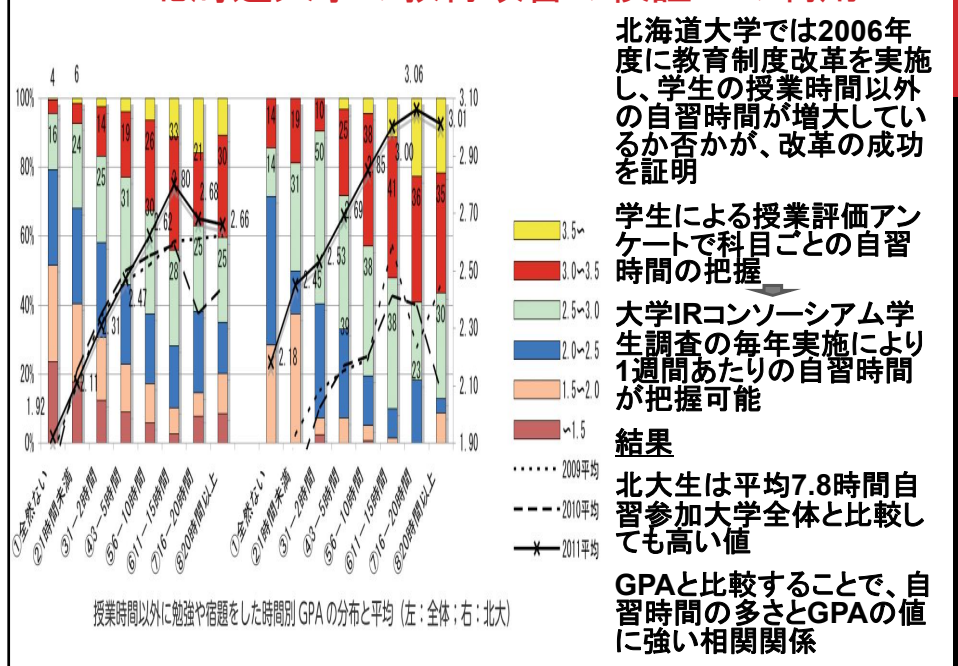
入学後の能力変化：分析力や問題解決能力



入学後の能力変化：専門分野や学科の知識

甲南大学では、2013年に認証評価を受信する際に本コンソーシアムの相互評価結果を活用
新設学部の学生の「学生に修得させるべき能力」の数値結果を提示し、相互評価結果も提示

北海道大学の教育改善の検証への利用



まとめ: 教学マネジメントとしての教育改善プロセス

- ▶ 直接評価と間接評価から得られた学びの実態をひとつの教育情報と捉え、実際に教育改善に結び付けていくための課題は何か？

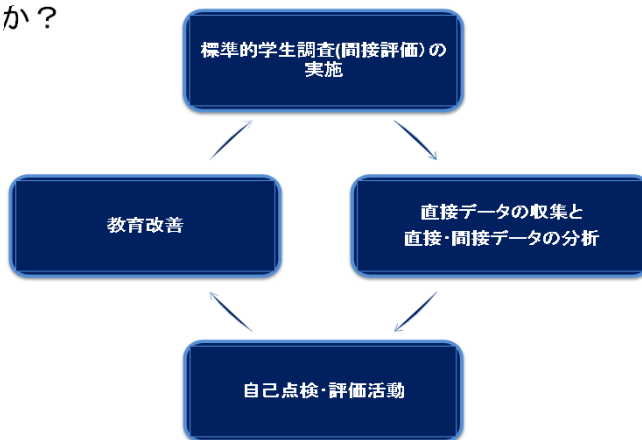


図1 質保証に向けての教育改善プロセス

ご静聴ありがとうございました

質問は ryamada@mail.doshisha.ac.jp

までお願いいたします

(メモ)

A series of horizontal dashed lines for writing notes.